

令和8年度 恵社研研究計画

I. 研究主題

社会認識を深め、社会とかかわり続ける力を育む社会科学学習の創造

II. 研究目的

主題設定の理由

1. 研究の経過から

石社研では、令和2年度から5年間「探究を通して、主体的に社会とかかわる力を育む社会科学学習の創造」の研究主題のもと、地域素材を位置付けた単元構成の工夫、資料の提示や発問の工夫等の実践検証を積み重ねてきた。子どもたちの一番身近な社会であり直接かかわることができる地域を取り上げ、単元構成の工夫により社会的事象を多角的に捉えていくこと、資料の提示や発問の工夫により子どもたちが「なぜ?」「どうして?」と疑問をもち、社会的事象を捉えなおしながら探究していくことで、社会にかかわっていくことを目指した研究であった。

各市町村において充実した取組がなされ、単元構成の工夫により社会的事象を多角的に獲得できるようになったり、単元を通して子ども自身の振り返りを充実させることで学習内容を自分事として捉えたりする子どもたちの姿が見られた。

しかし、ねらいに迫るための単元・授業デザインがこの数年の研究の課題として挙げられる。資料の提示や子どもたちの思考を深めるための学習活動の吟味・精選であろう。資料や「知識を得る場面なのか」「協働で考える場面なのか」ねらいを明確にした単元構成をしつつ、対話場面の設定やICT機器の活用等、その場面・活動に適した学習の「方法」を選ぶ必要がある。どの場面でどんな学習方法を選択することが深い学びにつながるのか、教育内容と子どもたちの実態を踏まえて精選していくことが重要である。また、振り返りを単元・毎時間の学習につなげていくことで、その単元・毎時間の学習を子どもたちにとって豊かにしていくことが必要である。

2. 今日的な課題から

※1「このような時代にあって、学校教育には、子供たちがさまざまな変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」

※2「VUCA」
Volatility（変動性）、
Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）

「教育振興基本計画」
令和5年6月16日
閣議決定

平成29年3月に公示された学習指導要領では、改訂の経緯を「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造や雇用環境は大きく、また急激に変化しており、予測が困難な時代となっている」ことから「子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は激しい挑戦の時代を迎えていると予想されている。」と述べている。また、令和5年6月に閣議決定された教育振興基本計画（※1）では、「現代は将来の予測が困難な時代であり、その特徴である変動制、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字を取って『VUCA』（※2）の時代」とあり、その危機感や課題意識から、将来の変化を予測することが困難な時代に生きる子どもたちとともに、2030年に向けた未来を意識してどのような社会を創造するか（Well Being な社会の創造）、という答えがなく解決が困難な課題に取り組んでいくことが求められているのである。

社会科が目指す最終目標は「公民的資質・能力」の育成である。長い間目標として据えられたものを具体化することで、社会科が目指す姿がより見えてくるのではないかと考え、この「**公民的資質・能力**」を、石社研として、「**社会に自分からかかわり・持続可能な社会の創り手となる資質・能力**」と定義した。（2025年一部変更）これは、「社会に開かれた教育課程」や、社会参加・参画が鮮明に打ち出された学習指導要領、「2040年以降の社会を見据えたとき、現時点で予測される社会の課題や変化に対応して人材を育成するという視点と、予測で

きない未来に向けて自ら社会を創り出していくという視点の双方が必要」と述べている教育振興基本計画に合致している。

この資質・能力を育むためには、子どもたちの社会認識を深めていくことが必要である。予測できない未来に向けて、子どもたちが「持続可能な社会の創り手」となるために、探究を通して学びを深め、地域・社会の課題解決に向けて主体的に参加していけるような力を育んでいかなければならない。子どもたちが社会に自分たちからかかわり続けるようにするためには、社会的事象から事実認識（＝子どもが事実としてわかったこと）に留まらず、目に見えない関係認識（＝何かとのつながり、関係、自分との関係としてわかったこと）、価値認識（＝そのものの意味や、社会課題、葛藤、さらなる問いなど）へと、社会認識を深めていく過程が必要である。

前述したこれまでの石社研の取組、そして学習指導要領等で提示された今日的な課題。それらを踏まえ、これまでの研究・実践検証を土台に、今年度からの２年間、研究主題を「社会認識を深め、社会とかかわり続ける力を育む社会科学学習の創造」と設定し、研究・実践を行っていく。

Ⅲ. 研究仮説

- ◆研究仮説１：子どもの社会認識を深めるために、思考の筋道を意識した単元構成を工夫することで、学びを通して主体的に社会にかかわり続ける子どもを育成することができるだろう。
- ◆研究仮説２：社会的事象から「なぜ?」「どうして?」と疑問をもたせ、探究する授業展開を工夫することで、社会的事象を深く学ぶ子どもを育成することができるだろう。
- ◆研究仮説３：子どもの実態を踏まえた学習の中で一人一人の学びを的確に評価することで、自分の考えを深め、社会に関心を持ち続ける子どもを育成することができるだろう。

Ⅳ. 研究内容

研究内容１

子どもの社会認識を形成していく単元構成の工夫

- ①思考の筋道を意識し、社会認識を深める単元構成の工夫
- ②地域素材を教材化し、学びを通して社会とかかわる場の設定

研究内容２

「なぜ?」「どうして?」と疑問をもたせ、社会的事象を探究する授業構成

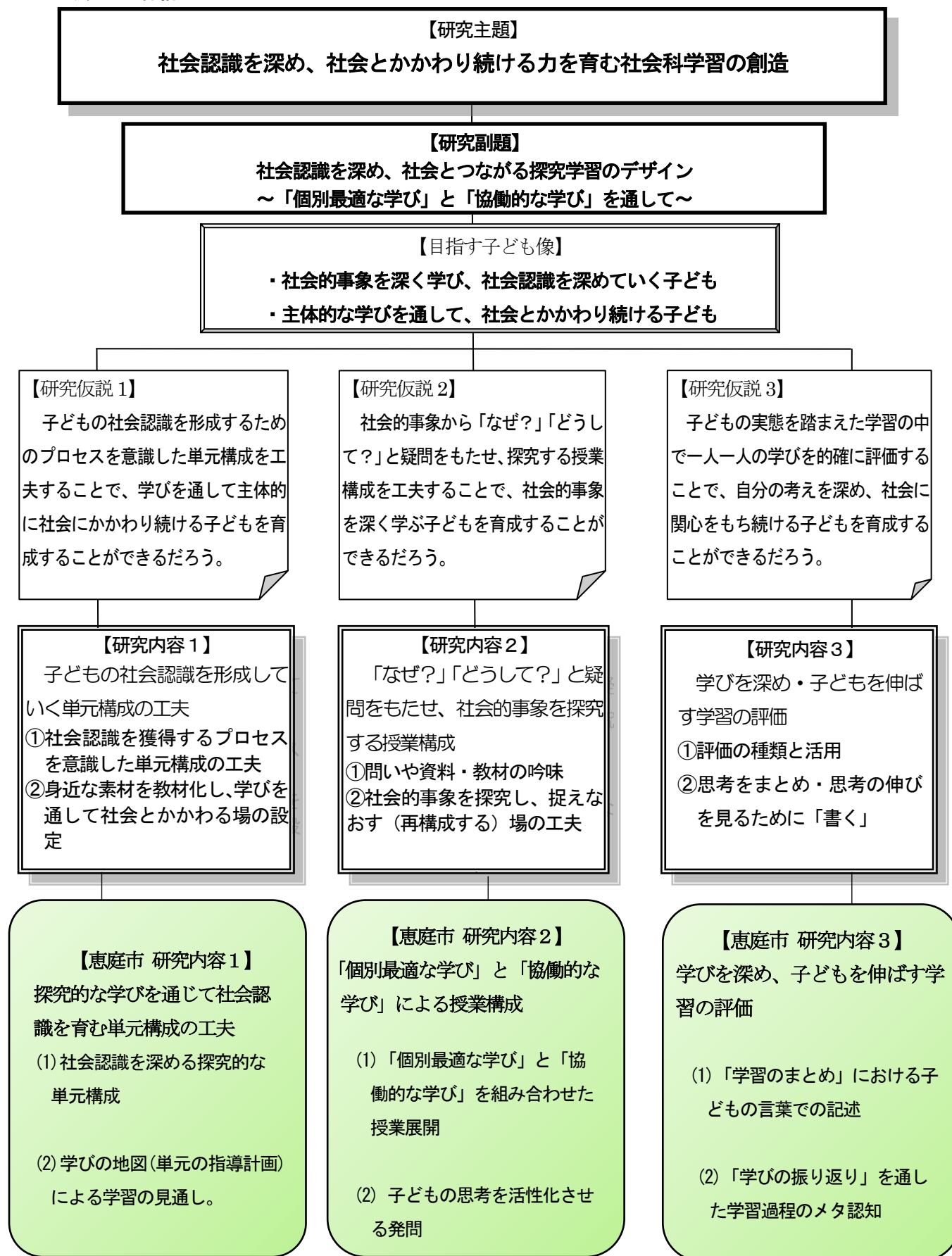
- ①問いや資料・教材の吟味
- ②社会的事象を探究し、社会的事象を捉えなおす（再構成する）場の工夫

研究内容３

学びを深め・子どもを伸ばす学習の評価

- ①評価の種類と活用
- ②思考をまとめ・思考の伸びを見るために「書く」

V. 研究の全体構造図



R8年度 恵社研 研究計画に関わって

1. 研究副題について

社会認識を深め、社会とつながる探究学習のデザイン ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して～

恵社研では、2023年度からの2年間、「探究的に学ぶ子どもの育成」を研究の中心に据え、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、子どもたちが社会的事象の深部を見極め、より良い社会を構築するための力を育む社会科学習の創造に取り組んできた。

これまでの恵社研では、「自分ごと」と「協働的な学び」を2本柱に研究を進めてきた。2020年度からの3年間は、「社会参画の基礎を育て、問いを生み出す授業づくりを通して」という副題のもと、主体的に社会とかわるための基礎としての「協働的な学び」と、自分ごととしてとらえるための自ら「問いを生み出す」授業づくりに取り組んできた。

しかし、実践の中で、「なぜ型」の課題が必ずしも主体的な学習につながらないことや、子どもたちの思考の筋道を見通した学習内容や方法の吟味の必要性などが課題として明らかとなった。

こうした背景を踏まえ、2023年度からの研究では、社会的事象における具体と概念形成を往還する問題解決型の学習活動を通して、よりよい社会を構築するための「新たな知」を創造・獲得することを目指してきた。

具体的には、探究的な学びを社会科の中心に据え、学習者が自ら問題を見つけ、解決のために主体的に学ぶ過程を重視してきた。その手段として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を組み合わせた授業展開を研究してきた。

これまでの長年に渡って恵社研で培ってきたことを土台にして、令和7年度からの恵社研の研究では、「社会認識を深め、社会とつながる探究学習のデザイン～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して～」を研究副題に設定した。そして、令和7年度の石社研の研究主題「社会認識を深め、社会とかわり続ける力を育む社会科学習の創造」を踏まえ、恵社研では、社会的事象を多角的に捉え、主体的に社会と関わり続けるための探究的な学びを、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して実現することを目指してきた。では、社会科における探究的な学びとは、どのような学びなのか？恵社研では、以下のように押さえる。

社会的事象における具体と概念形成を往還する問題解決型の学習活動が繰り返される中で、その事象の深部を見極め、よりよい社会を構築するための「新たな知」を創造・獲得する学び

(「社会科×探究」授業デザイン 中村祐哉 著より参照)

つまり、学習者がある事象から問題を見つけ、その問題を解決するために主体的な学びを中心とした過程の中で、具体的な体験をしたり、概念的な知識を獲得したりしていくということである。令和6年度まで恵社研で検証してきた「問題解決学習」のプロセスこそ、まさに探究的な学びの過程の一部と考え、社会科における探究的な学びを次の探求へと紡ぎ続ける社会科の授業を通して、研究主題にもある「追究を通して、主体的に社会とかわる力を育む社会科学習の創造」について検証していく。そして、探究的に学ぶ子どもへと育成していく手段として、1つの課題を追究する際に、独自→相互→独自、つまり「個別最適な学び」と「協働的な学び」の互恵的で相補的な授業展開を構成していく。また、探究的な学びを構築していく上で、非常に重要な要素である「学びの振り返り」を評価として取り入れていく。さらに、昨年度の継続として、授業の終末場面では子ども自身の言葉で学習内容をまとめていく。

探究的な学び

・社会的事象における具体と概念形成を往還する問題解決型の学習活動が繰り返される中で、その事象の深部を見極め、よりよい社会を構築するための「新たな知」を創造・獲得する学び

- ▶授業における探究的な学び
- ▶単元における探究的な学び
- ▶学年を超えた系統性と持つ探究的な学び



よりよい社会を構築するための「新たな知」の獲得と活用

社会科における個別最適な学び

・個別最適な学びとは、「指導の個別化」と「学習の個別化」に整理される。具体的には「学習の複線化」がイメージしやすい。

- ▶指導の個別化…すべての子どもに共通の学力を等しく保障すべく一人一人に個別最適な指導方法、学習時間、教材などを柔軟に提供すること。
- ▶学習の個別化…全員が共通に身に付けた基礎学力を足場として、得意分野にこだわりをもつ領域の学びに存分に取り組む機会を提供すること。
- ▶学習の複線化…「学習のめあての複線化」「調べ方の複線化」「まとめ方の複線化」「学習の資料の複線化」「学習の事例の複線化」「学習活動の場の複線化」

社会科における協働的な学び

・「協働的な学び」では、他者の社会的な見方・考え方に触れることで、個別に学んできた子ども達に「再考する」ことが起き、社会的な見方・考え方がより深まっていく。社会的な見方・考え方が深まる場面には、「多面化」「多角化」「一般化」「具体化」の4つあると考える。

- ▶「多面化」する場面…例えば、歴史的な視点で社会的事象の特色や意味を捉えていた子どもが、地理的な視点や関係的な視点からも捉えられるようになる場面。
- ▶「多角化」する場面…例えば、農民の立場から社会的事象の意味を捉えていた子どもが、権力者の立場からも捉えられるようになる場面。
- ▶「一般化」する場面…例えば、「気候条件を生かした生産をしている」という捉え方を農業生産だけに当てはめていた子どもが、他の産業に転用してあてはめられるようになる場面。
- ▶「具体化」する場面…例えば、水産業の工夫の具体例を1つしか上げられなかった子どもが、2つ3つと数多く挙げられるようになる場面。

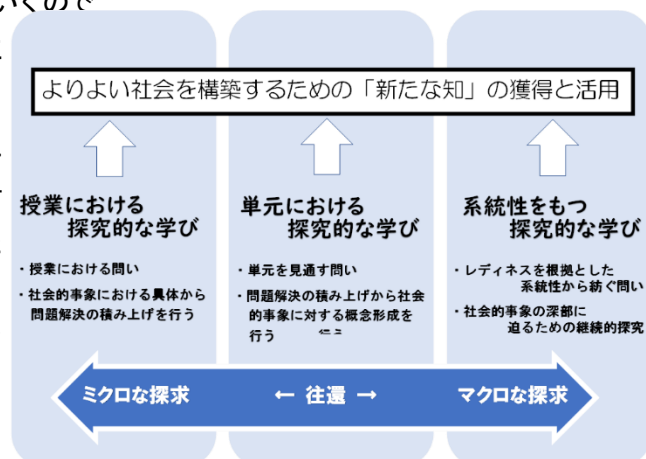
2. 研究内容の具体化

研究内容 1 探究的な学びを通じて社会認識を育む単元構成の工夫

これまでの恵社研で研究・検証してきた「問題解決的な学習」は、これまでの社会科が大切に培ってきた子ども達の学びである。そのプロセスこそまさに探究的な学びの過程の一部であると言える。もっと言えば、社会科の学び自体がほぼ探究的な学びととらえることができるのではないかと考える。探究的な学びとは、子ども自身が自分で問題を設定し、その問題を解決するために情報を収集・分析し、意見を交換したり協働したりしながら進める学習活動のことである。反対に、探究的でない学びとは、先生が答えを知っており、教科書を使った講義を受けて、正解が決まっている問題を解くような授業を受けることだと言える。

社会科での問題解決学習
社会科における探究的な学び

社会科における探究的な学びの授業や単元構成としては、資料などから子ども達が社会的事象に対する問いをつくり、そしてその問いの解決に向けて、調べ学習を含んだ探究的な学びを展開していく。取り扱う社会的事象の具体において、問いの解決を1つ1つの授業で積み上げていくことで、それらはやがて概念形成へと繋がり、単元を見通す問いの解決へと向かっていくと考える。さらに、単元で獲得した概念的知識をもって、そのレディネスを、学年を超えた探究的な学びへと必然的に紡がれていくのではないかと考える。資料①に示すそれぞれのゾーンは、独立したものではなく、各授業で設定される問いから生み出される問題解決型の学習活動におけるミクロな探求の積み上げと、単元の系統性を踏まえたマクロな探求を繰り返し行ったり来たりすることによってより良い社会を構築するための「新たな知」の創造と獲得につながっていくと考える。これが、恵社研で押さえる【社会科の中における探究的な学び】である。



(1) (1) 社会認識を深める探究的な単元構成

＝探究的な学びの基本ステップ＝

- ①課題の設定
- ②情報収集
- ③情報の選択
- ④情報の分析・集約
- ⑤発表（レポート、新聞形式、スピーチなど）

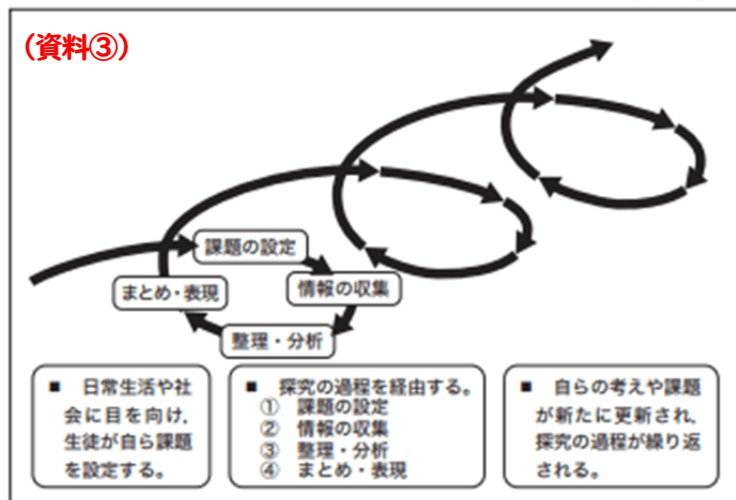
(資料②)

恵社研では、主体的に社会にかかわる子どもを育成するために、研究内容1では、社会認識を深める探究的な単元構成を検証していく。

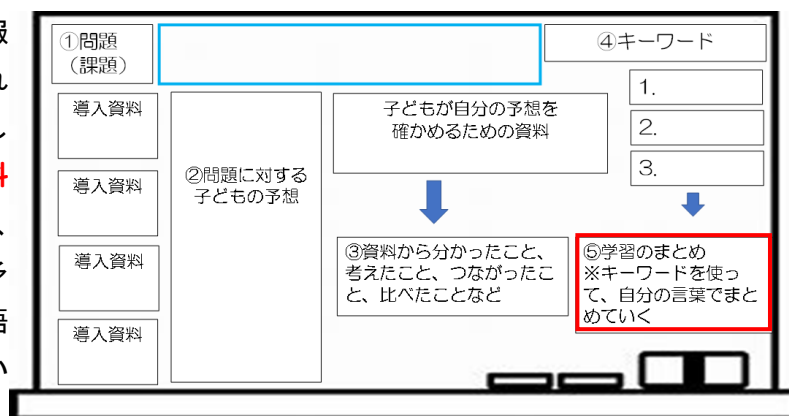
探究学習では、あらかじめ決められた正解

がない中で答えを考え出す活動を通して、導き出した結果だけでなく、どうやってそこにたどり着いたのかのプロセスが非常に重視される。探究的な学びにおける単元構成の基本ステップ（資料②参照）は、

(資料③)



①課題の設定、②情報収集、③情報選択、④情報分析・集約、⑤発表の5つのステップで構成される。そのステップを踏むたびに振り返り、見直しを行ってから次のステップに進んでいく（資料③参照）。また、一単位時間の授業においては、①問題（課題）把握→②問題（課題）に対する予想→③資料等から分かったこと→④社会科用語（キーワード）の獲得→⑤学習の振り返りという流れを基本



（資料④）

型とし、板書も構造化することで、子ども達の探究的な学びの一助となると考える（資料④参照）。

（2）学びの地図による学習の見通し。

（資料⑤）

恵社研では、単元の指導計画とは別に“学びの地図”を単元の指導計画として作成していく。学びの地図とは、単元を通して、1単位時間ごとの目標と学習の振り返りを表にまとめたもの（資料⑤参照）である。学びの地図を活用することのメリットとしては、子ども達が、学習のGOAL（目標）とWHY（目的）を理解し、見通しを持って学習に取り組むことができる点と、毎時間の学習の振り返りを書くことで、自分の探究的な学びの足跡を把握することができ、学習過程のメタ認知をすることができる（研究内容3にも関わる）点が挙げられ、子どもが学びを自己調整することに役立つ。

時		学習内容	学習の振り返り
1	目標：今日のGOAL	◎ゴール達成度 () %	◎自分に合った学び方 ◎ ○ △
		◎振り返り 100%になるためにはどうしたらいいの？	
11	目標：今日のGOAL	◎ゴール達成度 () %	◎自分に合った学び方 ◎ ○ △
		◎振り返り 100%になるためにはどうしたらいいの？	

研究内容2

「個別最適な学び」と「協働的な学び」による授業構成

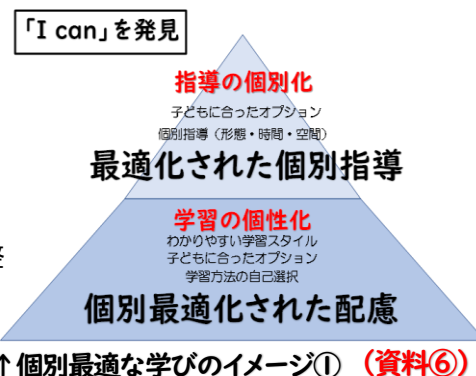
令和3年1月26日に出席した中央教育審議会において、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～すべての子ども達の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」が取りまとめられた。その中で、「2020年代を通じて実現を目指す学校教育を『令和の日本型学校教育』とし、その姿について「すべての子ども達の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びとした」と記載されたことから、学校教育が目指すべき目標の1つとして定められたと言えるだろう。そこで、恵社研も研究内容2を「個別最適な学び」と「協働的な学び」による授業構成として検証していく。

また、子ども達の思考を焦点化させていくためには、やはり教師側の問いが重要な役割を果たしていく。子ども達の思考を活性化させる発問づくりも検証していく。

（1）「個別最適な学び」と「協働的な学び」を組み合わせた授業展開

まずは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」とは何か？ということ整理し、恵社研として定義していく

『個別最適な学び（資料⑥、⑦参照）』とは、1つは、一人一人



に合った学習時間や教材、指導方法を柔軟に、あるいは多様に準備して、子ども達が自分に合った方法で学習できること（「指導の個別化」）。つまり、一人一人に個別最適な指導



↑個別最適な学びのイメージ②

方法や学習時間や教材の豊かで柔軟な提供を進める考え方である。もう1つは、自分にはどんな学び方があっていて、また何を学習するのが必要かということ（「学習の個性化」）である。つまり、その子が得意な領域や興味が持てる分野を見出したり、学ぶ内容は共通だが自分はどんな学び方だとうまく学べるのか気付かせたりするという考え方である。

『協働的な学び（資料⑧参照）』とは、文字通り、1つの課題に対する集団での学びである。そこには、「認知面」「態度面」「活動面」の3つに意味や価値があると考えられる。認知的な側面からいうと、情報が手に入る、アウトプットしていく。あるいは他者との関係性やコミュニティの中に知が創造される。態度的な側面では、「違う」とか「多様である」ということを実感できる。お互いに力を合わせて協力することに意味がある。お互いに共有することで新たなものが生まれてくるという価値が考えられる。活動面ではお互いに交流し

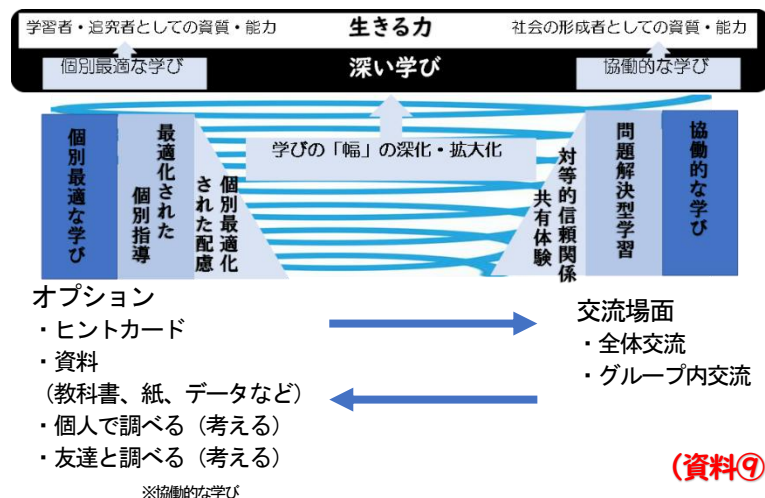


てコミュニケーションを行うことや、力を合わせながら目標に向かうこと。様々な人たちと協力しながら、物事に取り組み、社会参画していくという活動が考えられる。

恵社研では、この「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体化することで、子ども達の学びの追究に繋がっていくのではないかと考える。つまり、「協働的な学び」の中で、「そういう考え方もあるんだ」「そんなアプローチの仕方もあるんだ」

を共に共有し、「個別最適な学び」として「自分はこのやり方で学んだ。この形で進めていくと自分自身で試行していけるんだ」という経験が、授業、教室の中で積みあがっていくことに繋がっていくと考える（資料⑨参照）。

恵社研では、個別最適な学びから協働的な学びへ、さらに再度個別最適な学びに繋がる連続性のある授業を大切にしたい。



(資料⑨)

(2) 子どもの思考を活性化させる発問

恵社研では、子ども達に「なぜ?」「どうして?」と疑問をもたせ、追究させていくためには、やはり【問い】が重要になっていくと考えている。そこで、昨年度に引き続き【問い】について検証をしていくが、今年度より授業の中核的な問いとなる主発問を、“子どもの思考を活性化するポイント”と設定して検証していく。

恵社研では、子どもの思考を活性化する【問い】を『子どもの主体的な学びを促し、社会的な見方や社会的な考え方をはぐくむ授業者が子どもに働きかける問い』と押さえる（資料⑩参照）。

『社会的な見方をはぐくむ発問』とは、資料を効果的に読み取らせる発問であり、社会的な見方を働かせて抽出した情報

を活用しながら思考活動（分類・比較・関連付けなど）をすることができるような発問である。

ただし、子どもの思考を活性化する発問は、抽象度の高い「見えないもの」への発問となりやすく、思考の困難さが想定される。ただ「なぜ～？」と問うのではなく、例えば、「農作業の時間は減っているのに、なぜ収穫量は増えているのだろうか？」のように、「Aは～なのに、なぜBは～なのだろうか？」のように複文型の発問にしたり、「沖縄で菊を栽培する良さは何でしょう？」というような限定的な発問にしたりするなど、考えるべきものを焦点化し、スモールステップ化した発問で答えやすくすることが大事になってくると考える（資料⑩参照）。

《恵社研が目指す“思考を活性化する発問”とは…》

①知的好奇心を喚起する問い

（常識や既習の知識を揺さぶる問い）

②主体的な探究活動を促す問い

（構造化された問い）

③子ども達自身が持つ社会の見方・考え方を成長させる問い

（本質的な問い）

（資料⑩）

【「問い」の型の例】

（資料⑪）

①逆説の「問い」～なのに、なぜ…？

②子どもがおもしろそうと思う「問い」…何？ なぜ？

③活動を促す「問い」…しよう！

④子どもに決めさせる「問い」…どちらを選ぶか？

もし、〇〇だったら？

研究内容3 学びを深め、子どもを伸ばす学習の評価

恵社研の研究内容3は、「評価」である。恵社研では、まず、子どもの思考の伸びを見取るためにはどうしたらよいのかと考えた。その時間における大事なポイント（キーワード）をしっかりと押さえることができているのか、学んだ事柄や用語、語句を使って説明できているのか。それを見取るために、1時間ごとのまとめを子ども達の言葉でまとめさせることに取り組むことにした。また、子ども自身の学びを振り返ることにも取り組んでいく。本時の学習内容は理解できたのか、本時の学び方は自分に合っていたのかなどを振り返ることで、自分の学習過程をメタ認知し、次時以降の学習に生かすことができるようになるのではないかと考えている。

①「学習のまとめ」における子どもの言葉での記述

学習のまとめは、その時間に学習したことを理解できたかどうかを計ることができるポイントである。だからこそ、この部分を子ども達に自分の言葉で書かせたい。

自分の言葉で書くというのは、本当に難しい事である。だから、最初は授業の中のポイント（キーワード）をつなぐことから始めていく。または、指導書のまとめのような抽象的なまとめを教師側から提示し、それに続く形で、「例えば」や「つまり」などの言葉とつなげて、具体的な事実を考えてまとめていく。本時のまとめをスラスラ書けたことで自分の自己評価にもつながり、また、書けなかった場合には友達のまとめを参考にすることで相互評価にもつながっていくと考える。

▶本時の学習の大切なキーワードをつなぐ。

（例）※6年「大陸に学んだ国づくり」聖徳太子の学習…キーワード「**天皇**」「**仏教**」

- ・聖徳太子は、**天皇**中心の国づくりを目指して、中国に遣隋使を送って政治の仕組みを改め、**仏教**を国づくりに取り入れた。それは、大小様々な国に分かれていた日本を1つの大きな国にまとめることにつながっていった。

▶抽象的なまとめから、具体的な事実をつなぐ。

（例）※6年「憲法と私たちの暮らし」より

- ・国が行う仕事には税金が使われており、国民の生活を支えている。例えば、安全で健康な暮らしを守るために、警察や消防の仕事にかかる費用に税金が使われている。

(2)「学びの振り返り」を通した学習過程のメタ認知

研究内容1でも述べた「学びの地図（単元構成）」を活用し、単元の学習の見通しを持たせるとともに、1時間ごとの学びの振り返りを書くことで学習に対する自己評価を行わせる。その時間の理解度や学び方の足跡から、自分で自己調整していく力をはぐくむことを目的としている。また、この学びの地図の子ども達の振り返りから、子ども達の主体的な学習態度の評価をすることもできるとともに、指導者側のオプション調整の参考にすることもできる（資料⑫参照）。

時	学習内容	学習の振り返り
1	目標：今日の学び	◎ゴール達成度 () % ◎振り返り 100%になるためにはどうしたらいいの？
11	目標：今日の学び	◎ゴール達成度 () % ◎振り返り 100%になるためにはどうしたらいいの？

▶自己調整のためのオプション

- ・ふり返りのコメントによるモチベーションの向上を図る。
- ・「学びの地図」による自己評価の提供。
- ・その学び方が適切だったのか、ふり返らせる。「やってみてどうだった？」
- ・自分で調整させていく。

(資料⑫)

※参考文献

- ・香川県小学校社会科教育研究会『社会に開かれた教育課程による2タイプの社会科学習』東洋館出版社 2019年
- ・荒井真一 前田賢次編『学力と教育課程の創造』同時代社 2013年
- ・粕谷昌良『アナザーストーリー-の社会科授業 異なる立場から多角的に考える力を育てる』学事出版 2019年
- ・唐木清志編著『『公民的資質』とは何か - 社会科の過去・現在・未来を探る -』東洋館出版 2016年
- ・前田賢次『『これからの社会科授業』に向けて』東京書籍「教室の窓北海道版vol.16小学校」 2019年
- ・須本良夫 田中伸編著『社会科教育におけるカリキュラム・マネジメント～ゴールを基盤とした実践及び教員養成のインストラクション～』梓出版社 2017年
- ・澤井陽介『小学校社会 授業を変える5つのフォーカス』図書文化 2013年
- ・由井蘭健『一人一人が考え、全員でつくる社会科授業』東洋館出版 2017年
- ・波 巖『よりよい学習指導案からよりよい授業実践へ』東洋館出版 2010年
- ・石橋昌雄『社会科授業実践50のポイント』教育出版 2013年
- ・村田辰明『社会科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版 2013年
- ・C.A. トムリンソン T.R. ムーン『一人一人を生かす評価 学び方・教え方を問い直す』北大路書房 2018年
- ・北 俊夫『思考力・判断力・表現力を鍛える新社会科の指導と評価』明治図書 2017年
- ・村越 含博『子どもが社会に参加するための学力をどう捉えるか』雑誌『教育 No.926』旬報社 2023年
- ・『教育科学 社会科教育 No.769』明治図書 2023年
- ・中村祐哉『「社会科×探究」授業デザイン』明治図書 2022年
- ・赤坂真二『個別最適な学び×協働的な学びを実現する学級経営』明治図書 2022年
- ・桂 聖 他『授業のユニバーサルデザイン vol.13』東洋館出版 2022年